

1. 今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点	2. これからの教育にとって大事な「キーワード」「視点」	3. 取組の基本的方向性
<p><b>【人口構成の変化（高齢化）、寿命の長期化】</b> ○人生 100 年時代。2055 年ごろには子どもたちの割合が 1 割を切り、2100 年頃には日本人の人口は 5000 万人を切る見通し。しかし、悲観的にならず『人生 100 年時代』をどう生きるか。子どもたちを主役とした「持続可能な社会」「誰も取り残さない社会」を作っていく。</p> <p><b>【社会情勢の変化】</b> ○2030 年には現在の仕事の 50%が AI などによってかわられるといわれている。便利となる一方でシステムに依存させられてしまうことならないか。→自我、自己意識が要らなくなる可能性。人の存在のあり方がより問われてくる。 ○子どもの貧困、認知高齢者の割合の増加している。障害、多様性をどう社会に実装するか。 ○経済格差はより大きくなり、すべての大人が安心して働ける社会に果たしてなっているのかも大きな危惧がある（資料 19－1）。 ○地域社会での孤立が深刻になる中で、家庭でも孤立している子どもは、学校でのみ、保護者以外の大人と出会うことができるという深刻な環境にある（資料 19－1）。 ○「先行き不透明な時代」・「予測困難な時代」（資料 19－2）。 ○「不確実性」、また「成熟社会」「人口減少社会」（資料 19－2 調整会議委員）。 ○「Society5.0（超スマート社会）」・「人生 100 年時代」（資料 19－2）。 ○偏差値で今の受験体制が動いているかというところと本当はそうではない。今、大学入学者の 6 割が AO 入試で入っている。AO 入試がうまくリンクしていない。欧米の有名大学では、NGO などでの活動実績よりも、地域での活動実績の方が評価される。それが世界的潮流となっている。日本はいまだに同じようなテストをやって枠に入っていれば取りますよ、という工業社会のやり方でやっている。</p> <p><b>【これまでの認識を変える必要性】</b> ○「同じだから平等ではなく、異なるから平等な（比較しない）社会へ」これまでは学校の成績で社会の「位置づけ」が与えられた。これを変えなくてはいけない。これまでの「平等」の認識を変える。みんな違っている、比べられない存在。だから「平等」。→学校は一人ひとりの違いを認めあい、比較・競争ではなく協働して創造する場へ→評価しない。序列化はやめる。 ○これまでの通勤・通学の在り方が変わり、これまでの枠組みがなくなることにより、これからは自分で自分の生活を律する必要がある。その力を育成する必要がある。 ○「暇」と「退屈」があると過去をほじくり、トラウマとなって、さらにそれが非行を誘発する原因にもなる。孤立したまま退屈になると、傷や苦痛につながる。 ○職業的自立偏重の狭義の学力重視からの転換がいま喫緊に必要である（資料 19－1）。 ○『学び』の社会へ→誰でもが価値を創造し続ける社会。（子どもたちをどうおもんばかるか。想像力を持って子どもにあたっていく） ○「評価を変えよう、やめよう」PDCA サイクルは教育にはあてはまらない。縮小化するだけ。開放的な循環に変えていくことが必要。 ○人生 100 年時代、子どもたちが自分で自分の人生をつくっていくにはどうしたら良いか。もう大人には教えられない。学校教育だけで知的な活動を終わらせてはいけない。 ○コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会で言った以上「地域で責任を取る」というのが本当の意味。学校が抱え込まない。 ○私が少し関わっているある小中一貫校では、PTA をなくし、学校運営協議会も置いていない。地域ルームというのが学校にあり、そこに地域の方が遊びに来てお茶など飲んでいる。そこに先生が来て相談を投げかけると地域に話を広げてもらって、地域の方がどんどんボランティアに来てくれるような関係が出来上がっている。PTA がないので、（保護者の誰かが）PTA に役員にならなくてもよい。また地域が、今までは「プラスバンドの音がうるさい」といったようなクレームばかり入っていたのが、最近は「プラスバンドの子上手になったね」といった声が変わってきて、クレームは殆どなくなった。PTA が無くても他の組織で動くのではないかと考えると、違う関係もつくれるかもしれない。 ○2015 年、就学前から後期中等教育までの 15 年間一貫したカリキュラムが中教審</p>	<p>○「<b>センス・オブ・ワンダー（不思議に思う力・好奇心）</b>」の育成 →「センス・オブ・ワンダー」という言葉が出たが、区立子供園長会からは『<b>はてなの連鎖</b>』が展開される教育・保育を保障する」という提言がでている。乳幼児から大人まで自分自身がはてなの連続を、一人でも追及したり、他所との協働による追及したり出来たら、学びも深まっていく。「はてなの連鎖」はいい言葉だなと思った。</p> <p>○「<b>（子どもの）センス・オブ・ワンダー</b>」へ共感する他者 ○「<b>（情意面で、）意欲・探究心</b>」（資料 19－2 区立中学校長） ○「<b>主体的な遊び</b>」自分で見て、自分で考え、自分で判断して行動する（資料 19－2 子供園長会）。 ○「<b>一人も取り残さない</b>」（or「<b>誰一人取り残さない（SDGs）</b>」（資料 19－2 調整会議委員）） →「一人も取り残さない」という言葉をもう少し砕いていく。でないと誰もが認める良い言葉が排除の概念として使われていくこと。例えば「けんかのない学校」という言葉を掲げると、けんかを起こす子どもが厄介な子どもとして排除される。そういうロジックで学校現場は進んできた面がある。</p> <p>○「<b>孤立させない</b>」 ○「<b>寄り添い</b>」排除しない、孤立させないということは大事かと思う。そういう部分で「寄り添い」ということが全世代にとって大事。コミュニケーションやつながりをつけていくという中で、人と人とが寄り添いあっていくことが大事。 ○「<b>ワクワク感</b>」（資料 23 説明より。シンポジウム意見の紹介） →地域や PTA も、調整的なことも含め、何か強制的な部分があってもある。そうした中で、ワクワク感や楽しさというのはものすごく大事。 ○「<b>つながり</b>」、「<b>対話</b>」、「<b>コミュニケーション</b>」（資料 23 説明より。シンポジウム意見の紹介） →「つながる」ということを考えた時に、そこに意思が必要な場合もある。それ以前に「<b>私たちはひと連なり</b>」であるという意識の改革が必要。自分たちは連なっていると考えると、どういう意思を持ってつながる必要があるのかということが生まれてくる。 →崩壊とまではいわないが地域コミュニティは活性化していない。そういう中で、「<b>つながりを作っていく</b>」というキーワードはとても大事。 ○<b>学校の機能が明確に変わるという視点</b>。狭義の学力をつける場から、子どもを中心とした「<b>学びのプラットフォーム</b>」みたいな、居場所機能が中心となるよう学校が再定義される。子どもと関わることで大人も学んでいくとか、教師も子どもと出会うことで学び直しながら自らの専門性を高めていくとか、「<b>学びが重層的に膨らんでいく学びのプラットフォームのような場所</b>」として学校を再定義する。 →学校はそこに通っている子どもだけでなく、保護者や祖父母も関わっている。卒業生の父兄も地域で頑張っている。そういうところから、学校というものを再定義して、地域のつながり、杉並区のつながりをつくっていくようなプラットフォームにしていくような視点もすごく大事。 →地域の立場にしても、支えるということから協働に変わっていくということをより具体的に、地域の皆さんに伝えるように発信していただきたい。</p> <p>○「<b>みんなで協力しあって、まちと子どもたちと一緒に育てる</b>」、こういった気持ちや、今回教育ビジョンの中で、地域の一般の方に向けても強く PR していたければありがたい。</p> <p>○「<b>子どもをまん中にした地域社会</b>」（資料 19－2） ○「<b>子どもの育ちを支える共同体の構築</b>」（資料 19－2 区立中学校長） ○「<b>地域や保護者との協働</b>」（資料 19－2 子供園長会） ○「<b>地域に開かれた学校</b>」あるいは「<b>地域と共にある学校</b>」（資料 19－2） ○「<b>市民に開かれた学校</b>」（資料 19－2） ○「<b>生涯にわたる学びあいの実現</b>」あるいは「<b>生涯学び、活躍できる地域の実現</b>」（資料 19－2） ○「<b>学社融合（学校教育と社会教育のハード面・ソフト面での融合）</b>」、「<b>地域コミュニティの担い手</b>」（資料 19－2） ○「<b>ことば</b>」と「<b>あいだ（＝人と人との関係性）</b>」</p>	<p><b>【体験活動と言語活動】</b> ○体験と言語（対話的な関係の構築・活用）。 ○言語能力のほか、認知能力・非認知能力を高める。 ○集団でコミュニケーションを取りながら体験的に学ぶ楽しさを実現できる環境を、杉並区としてソフトウェア・ハードウェア両面から整えるということが求められる。 ○学校での様々な経験、様々な人たちとの交流を通して学び、自分たちを見守ってくれている大人たちがいるという安心感を子供たちに伝えていく（資料 19－1）。 ○多様な人との触れ合いをとおして、豊かな人間関係の構築や他者を尊重する気持ちや育む（資料 19－1）。 ○正解のない不透明な時代・場面の中で、合意形成が図れる人間力や、自分たちの問題を自分たちで解決する力を育てる（資料 19－2）。</p> <p><b>【生きる力の育成】</b> ○「生きる力」が何なのか、はっきりわからない。自分で自分の人生を切り拓いていく力をつけてほしい。基本的には言語を使って対話的な関係において、お互いに理解・承認をしていくこと。そのためには社会体験が必要。 ○「生きる力」の付与から「生き抜いていける力」の付与へ（資料 19－2 調整会議委員）。 ○体験を通して自分の学びを編集していく。そこにスキルや知識が必要になってくると、初めてそれが「生きる力」として生かされていく。実際に役立つ。○好奇心や探求心を大切にして、デジタル化などの環境に順応した創造する力を育てる（資料 19－1）。 ○AI の時代の中でも、よく考え人と思いや考えを共有しながら生きる子どもを育てる。生きる力の基礎を培う幼児教育が全ての教育の基礎となるということを園と学校、保護者、地域と共有し、生涯学び続ける人を育てる（資料 19－1、19－3 子供園長会）。 ○生きて働く力の育成。どれだけ知識、情報を溜め込んだより、それを駆使して何ができるか（資料 19－2 調整会議委員）。</p> <p><b>【主体的・対話的で深い学び】</b> ○主体的・対話的で深い学び（子どもたちがみずから関心「センス・オブ・ワンダー」をもって、好奇心を持って主体的にかかわり、対話的な関係の中で人と対話する中で新しい価値を探求するような深い学び）をする。また、そのためには教員の育成内容も変えていく（資料 23 中教審答申より）。 ○子どもたちに学校はどんなのと聞くと楽しい、と言う。それは、授業ではなく、みんなと交流出来たり一緒になって探求出来たりということが楽しいと。個別学習を進めることと、楽しいという関係の中で、もっと変わっていったりつき詰められたりといった経験をしていくことが大事。 ○それぞれの成長段階や状況において、子ども達の可能性を潰すことなく、多様な形で好奇心を開拓し、主体的な学びにつながる環境をつくる（資料 19－1）。 ○「<b>主体的・対話的で深い学び</b>」を大人と子どもが同時に体験できる環境づくり（資料 19－2） ○興味や能力を伸ばしたい子どもが、より深い学びを探求し、存分に成長できる環境をつくる（資料 19－3）。</p> <p><b>【自己肯定感・自己有用感の育成】</b> ○子どもたちが自分の周りを自分で変えることができるという経験、極端に言えば校則を変えるとか。そういうことを、自分たちで作っていく、自分たちの周りを自分たちで変えるいくという経験をすることによって、大人になって社会を変えていくことができるというような自己有用感を育てていけるのではないかと。 ○自己肯定感と自己効力感を高める。子どもたちに寄り添い、子どもの考えや想いに耳を傾けるとともに、子どもたちが自信を持てる場をつくっていく（資料 19－1）。 ○喜びや問題を他者と共有することから、自己の存在や自己実現の道筋を実感し学ぶことも多い。子どもにも理解者が必要であり、地域はその受け皿として、子どもたちの心の見守りの一翼を担う（資料 19－1）。 ○子ども自身の好奇心を中心に置き、大人たちはそれを傾聴し応援する（資料 19－1）。</p>

1. 今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点	2. これからの教育にとって大事な「キーワード」「視点」	3. 取組の基本的方向性
<p>答申で初めて示された。人生 100 年の中のわずか 15 年間で学んだことだけで 100 年生きてください、ということではなく、15 年間でその後の学び続ける力の基盤をつくる、という趣旨。そのためには社会と連携することが必要。</p> <p>○学校が変わるためには学校を取り巻く、保護者を中心とした地域の意識が変わらないと、なかなか変わる勇氣あるいはきっかけのようなものは持てない。</p> <p>○子どもの育成や対応を担うのは教師だけではない。教師以外のスタッフ、地域の支援を得て、教師の役割とそうではないものを明確にしていくということが必要。教師には教師にしかできない教育がある。「子どもを学校に預ければ」とか「何でも先生にやってもらおう」といった保護者や社会の意識を変えていくということもビジョンの重要な役割だと思う。それを実現するためには地域の支援が非常に大事だがそれを今後どう広げて、持続していくのかが大きな課題。</p> <p>○自分が地球の一部で、ヒトは動物の一種で、私たちは地球や自然界とひと連なりの存在であるということ子どもも大人も認識する必要がある。地球温暖化の問題も 10 年後 20 年後もっと真剣に抜本的に考えていかななくてはいけないこと。</p> <p>○私たちが今までもってきた「学校とはこういう場所なのだ」「子どもとはこういう存在なのだ」ということをいっぺん取り払うとどう見えるか。我々が慣れ親しんできた社会ではない社会の在り方に変えようとしている中で、学びの場、学びの在り方、学びの概念そのものについて、どう変わるべきか、少し議論ができればと思う。</p> <p>○人生 100 年の時代、15 年（の学校教育で）完結させるのではなく、ゆっくり、じっくり、子どもによってはさらにもう少し時間をかけて、時には休んで、そして学びなおしていくことが認められるようなことが重要。</p> <p>○「子どもは小さな大人ではない」。大人、親の幸せがあって子どもたちの幸せがあるということ子どもたちもわかっている。子どもたちにはそういう感性、力がある。子どもの再発見、再認識。私たちはもう一度確認していきたい。</p> <p>→「子ども」を大人の従属物のように見ないで、ひとりの人格を持った存在としてとらえていきながらどういう関係を作るのか、当然「指導する」ということはあるかもしれないが、保護され指導される存在だけではない。</p> <p>○地域がより深く学校教育に関わっていく必要がある中、その支える「地域」が具体的にどういう形で支えていくのか。協力できる人たち、「地域」も育てていかななくてはいけない。「地域」も学んでいかななくてはいけない。そういう仕組みをどうやって作っていくか。先生も疲弊している中で、実際にCS、学校支援本部等はみな同じ顔ぶれになっており、担う人たちも疲れてしまっている。次の世代を育てていきたい。</p> <p>→23 区内では、地域が壊れてPTAが機能していない実態がある。町会や消防団などが消えていき、「地域」とは何だろうかといわれても「分かりません」と言わざるを得ないような状況がある中、「地域」は果たしてどういう形で学校と協働して子どもを育てるのか、その時に担い手作りということを考えなくてはいけない。</p> <p>○今までは「学校」と「家庭教育支援」と「社会教育」がセットになっていたが、今の中教審での議論では「家庭」が出てこない。家庭教育が入っていない。何故かという和家庭が多様化しすぎて家庭に頼るのは無理だという判断が働いている。また、「地域」についても東京などはいわゆる地域というものがもう無いんじゃないかという議論が出た。中教審の文章には盛り込まれていないが、子どもの将来を心配して関心を持っている企業があるのであればそこと連携をしていったいいんじゃないかというぐらいまでの議論がでている。やり方もあると思うが、そうなってくると公教育とは一体何かということも組み替えなくてはいけなくなってきた。逆にいうとそこまで来てしまっている。</p> <p>○今日議論に出なかったが、GIGAスクール構想一人1台タブレットPCが配置されていく中で、子どもの学び方をどう変えるかという議論をしていかななくてはいけない。私が知っている学校では一人1台タブレットPCが来たが、一人ずつ勉強することで差が出てしまっはいけないので教室に集めて先生が指示したとおりに同じ学習をさせているということが起こっている。こういうことが「平等」だと思われている。これからの「平等」は、一人ひとりが深くつき進めていくことを、どう交流しながら違うものに組みかえ違うものに作り出していける条件をつくるか、という考え方にしていかななくてはいけない。みんなが、どう教えあい、どう交流できるか、みんながそういうことをできる条件をみんなの中で作り出すか</p>	<p>→障害のある方や外国人の方は日本語がしゃべれない。でも、そういう人達ともコミュニケーションが成り立っていく、そこに新たな関係性が生まれていくということまで含めた「ことば」の特性、という視点を持っていきたい。</p> <p>→幼児教育ではことばの前のことばが非常に大事で、いろんな体験を通して感じて、自分なりに表現する。自分の中で感じたことを自分のことばで目の前の相手に伝えることをたくさん体験させる。小学生くらいになると、そこにいない人にも伝えることばを獲得していくと思うので、ことばの発達もそれぞれある。</p> <p>○「配慮と創造による対話」「対話による創造」</p> <p>○「垂直序列化から水平多様化へ」</p> <p>○「間（はざま）」を埋める、「間（あいだ）」をつくりだす、「間（あいだ）」から生み出す</p> <p>○「評価ではなく認め合いへ」</p> <p>○「コミュニケーション・連携・協力」（資料 19-2 区立中学校長）</p> <p>○「多様性と対話」自ら多様な人と協働して課題を解決する、チームで学び合う、しんどい学校、息ぐるしい学校からの脱却（同調圧力からの脱却）（資料 19-2 調整会議委員）</p> <p>○「多様性」という言葉は多くの委員が資料 19 で書いている。</p> <p>○これから増えていく「ニューカマー（日本に長期滞在する外国人）の子どもたち」に関する視点。</p> <p>○「相互依存」お互いに依存しあってもいいということを入れたい。</p> <p>○「共生社会」の実現に向けた、学校のあり方、地域社会づくり。特別支援教育の理念の中で、国が初めて日本の将来にとって大事なことだと言った。それは是非入れていただきたい。</p> <p>○「キャリア発達」。牧野先生が言われていたことは私の中ではその文脈になる。ただ、その言葉だけでは固いので何か別の言葉で。</p> <p>○「ファシリテーション」。権利と権利がぶつかり合う場面でどうやって折り合っていくか。そのあたりのことが学校教育に入っていくといい。</p> <p>○「あらゆる他者の価値を認め、尊重できる力」、「主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力」（資料 19-2）。</p> <p>○「インクルーシブ教育」「特別支援教育の推進」共生社会の形成に向けては、インクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築には、特別支援教育を着実に進めていくことが不可欠（資料 19-2 調整会議委員）。</p> <p>○「フル・インクルーシブ教育（すべての時間をすべての子どもたちが同じ場（通常の学級）で過ごすことを原則とする教育）」「市民性の教育」「主権者教育」「学校を心の安全基地に」「すべての教職員がひとりひとりの子どもを見守る教育」（資料 19-2）。</p> <p>○「学びを発見し続ける」「知識を自分だけのものにしない」「探求して、発見する喜びや驚き」「仲間と一緒にあって、発見し、創造するうれしさ」「それに駆動される「学び」「自分を仲間と一緒に作りつづけるうれしさに満ちた開放系の、やめられなくなる、運動」</p> <p>→「学び」の再定義というのも牧野先生がしてくださっているが、そのあたりも明確に書き込んでいくことが必要ではないか。</p> <p>→子どもの視点からすると「学び」と「遊び」の両輪として使っていった方がよい。子どもだけではなく大人も間違いなく「遊び」ということは重要になってくる。保育士の養成をしているが、保育士の先生も数年働いたら1か月でも休みを与えられるとリフレッシュして、また子どもに向かい合える。そんな社会の在り方も考えられるといいのかなと思う。「学び」「遊び」という言葉を一緒に括って話していった方が、広く区民や子どもたちにも落ちていくのではないか。</p> <p>→オンラインではできない学び、そういう活動が学校にはある。「仲間と一緒にあって、発見し、創造するうれしさ」という話があったが、まさに集団でコミュニケーションを取りながら体験的に学ぶ楽しさというのが、教科にとどまらない、学校における学びの素晴らしさである。</p> <p>○「学力偏重主義の是正」（資料 19-2）。</p> <p>○「学び続ける力」「自ら学んでいく力」予想不可能な時代となる中、環境が変わっても自ら学び続ける力が必要（第1回より）</p> <p>○「あらゆる環境の変化を乗り越え、自ら豊かな人生を切り拓いていくことので</p>	<p>○基本的な学習からでは自己肯定感を得にくい子どもたちもいるため、地域力を活かし未来に希望をもてるよう、多様な学習の機会を提供し補う（資料 19-1）。</p> <p>○自分は愛されている存在と実感して生活を送れるようにする（資料 19-1 子供園長会）。</p> <p>【学校と地域との協働、地域での学び】</p> <p>○非常に多忙な教員が、教育の専門職として子供たちに寄り添ってアクティブラーニングを実践できるように、学校の体系を組み替える。例えば、貧困問題をいま学校が抱え込んでいるが、地域やスクールソーシャルワーカーなどと役割分担し、学校が機能する（資料 23※中教審答申より）。</p> <p>○すべての教職員が一人ひとりの子どもの良さを多面的に見守る体制の整備（学級担任制の大胆な組み替え）、さらに、地域の市民が学校において子どもたちと日常的にかかわることができる場面の整備（資料 19-1）。</p> <p>○幼稚園・保育園の保護者が「そこに預けていれば大丈夫」と思わず、親も共に育っていく。そういう中から、一緒にやって行きましょう、ということが生まれるようなことが、とても大切ではないか。次の世代を育てていくための大人を育てていくことが必要。</p> <p>○地域が学校を支援するのではなく、地域と学校が協働するという考え方に変わっていく。地域で様々な体験活動・教育活動をし、子どもが生きる力を身につける（資料 23※中教審答申より）。</p> <p>○地域、保護者とのつながりの中で教育者が、子どもをしっかりと育てると共に、地域や保護者の役割も明確にし、共に育てる大切さを共有する（資料 19-3 子供園長会）。</p> <p>○地域にいろんな学びの場があると示していくことがすごく大事になる。</p> <p>○組織的にプラットフォームを作ろうとするとすごいがちになる。自然発生的な共同体、ゲマインシャフトのような、そこに来ることによってみんながワクワクし、つながりたいからそこに集まり、自然発生的に何かが起こるということが学校や子ども園・保育園を中心にプラットフォームになって展開していくような教育が行えると嬉しい。今、地域といっても地域は実体がない。確かな実体として存在するためには、学校や保育園といった施設がそうした場になっていくことが必要。</p> <p>○社会や企業との連携（資料 19-3）</p> <p>○「まち」との協働（ただしこれからは「課題」だけではなく「責任」も共有していく新しいスタイル）の推進（資料 19-1 調整会議委員）。</p> <p>○持続可能な視点での学校運営協議会の運営（資料 19-2 区立中学校長）。</p> <p>○学校・保護者・地域は、問題、課題だけでなく未来図の共有し、未来図を共創する。そのために各校でCS 中心に井戸端会議をし、未来図を創ってから共に検証する（資料 19-2 調整会議委員）。</p> <p>○できれば学校・保護者・地域で共創し、各校の実態に合わせたオーダーメイドの教育活動を進める（資料 19-2 調整会議委員）。</p> <p>【STEAM 教育】</p> <p>○「STEM (Science (科学), Technology (技術), Engineering (工学), Mathematics (数学)) 教育」から「STEAM (Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics) 教育」へ。</p> <p>Art (リベラルアーツ (教養)、もしくは芸術) が重要。</p> <p>○絵を描いたり、生涯スポーツを楽しんだり、本を読んだりといった、文化的に豊かな生活を享受するための基盤的な体験（資料 19-1）。</p> <p>○音楽演奏活動、アート活動など、これまでである活動も学校や地域の関わり方を工夫することで効果は上がる（資料 19-1）。</p> <p>【共生社会の構築・インクルーシブ教育】</p> <p>○全員参加型の共生社会と一緒に作る。子どもたち一人ひとりがもつ「権利」を自覚し、行使できるような支援を学校と地域、家庭で取り組む。また、多様性を認める相互承認の段階から、多様な他者と協働する段階への支援。持続可能な社会をつくるために自分らしい貢献が可能になり、キャリア発達が促されるような、インクルージョンをめざした社会づくり（資料 19-1）。</p> <p>○障害がある人もない人も、互いに尊重し合いながら暮らしていける共生社会の実現を目指す（資料 19-2 調整会議委員）。</p> <p>○多様な差異を尊重しあい、協力して社会をつくるために必要な、インクルーシブ</p>

1. 今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点	2. これからの教育にとって大事な「キーワード」「視点」	3. 取組の基本的方向性
<p>といったことを問わなくてはいけない。言い方を変えれば、個別最適を突き進めることと同時に、全体最適に持っていくにはどうしたらいいのか議論をしなくてはならない。そういうようなことを教育システムにどう組み込むかということもこれから問われてくるだろう。</p>	<p><b>きる力」「持続可能な社会の担い手、創り手となる力」</b>（資料 19-2）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「<b>変化を楽しむ力」「社会への関心興味」「自己肯定感」「心理的安全性</b>」（資料 19-2）。</li> <li>○「<b>美意識</b>」とか「<b>美的感覚</b>」アートの教育が大事という話があったが、何か「美しい」ということに皆が向かっていくと、そうそう間違ったことは起きないと思う。</li> <li>○「<b>個別最適な学び</b>」・「<b>個に応じた指導</b>」・「<b>指導の個別化、学習の個性化</b>」・「<b>協働的な学び</b>」の実現、充実（資料 19-2）</li> <li>○「<b>個別最適な学びと協働的な学びの往還</b>」（資料 19-2 子供園長会、区立中学校長）</li> <li>○「<b>人格形成の基礎を培う就学前教育・幼児教育</b>」の充実（資料 19-2）</li> <li>○「<b>9年間を一貫した」「知・徳・体のバランスの取れた」「質の高い義務教育・学校づくり</b>」の実現（資料 19-2）</li> <li>○「<b>就学前から保幼小中の一貫教育の推進</b>」（資料 19-2）</li> <li>○「<b>就学前教育から中学校までの学びの連続性の構築</b>」（資料 19-2 区立中学校長）</li> <li>○「<b>自然体験</b>」（資料 19-2 子供園長会）</li> <li>○「<b>教育システムの多様化</b>」多様性に対応した教育システムの構築。どのタイプの子どもたちも将来の選択肢がしっかりと出来る仕組みを整えて行く（資料 19-2）。</li> <li>○「<b>人間力</b>」（資料 19-2）</li> <li>○「<b>ふるさと杉並</b>」（資料 19-2）</li> <li>○「<b>サーモン計画</b>」卒業生が戻り、後輩や地域のために協力する（資料 19-2）。</li> <li>○「<b>第4次産業革命への適応</b>」ICTやIoTを理解し、活用できる教育（資料 19-2）。</li> <li>○「<b>学校再編（統廃合）</b>」（資料 19-2）</li> <li>○「<b>健康・安全</b>」（資料 19-2 区立中学校長）</li> <li>○「<b>教育のまち・すぎなみ</b>」（資料 19-2 調整会議委員）</li> <li>○「<b>学校は子どもが幸せになるための準備の場</b>」（資料 19-2 調整会議委員）</li> <li>○「<b>持続可能な施設整備</b>」これからの学校施設に真に必要なものとは（ 〃 ）</li> <li>○「<b>人にやさしさ、自分に強さ（自律と貢献・社会の中で共に生きる知恵）</b>」（ 〃 ）</li> </ul>	<p>社会に向けた基盤的体験（フル・インクルーシブ教育の実現）（資料 19-1）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○多様性を認める（特別支援も含む）（資料 19-3 子供園長会）。</li> <li>○様々な場面で「<b>選択肢</b>」のある教育環境づくり（合理的配慮の提供があたりまえになることも含めて）（第1回松浦委員、資料 19-2）</li> <li>○キャリア発達が子どもに自覚できる、あるいは大人からの価値づけがあり、コンピテンシーを育てる視点をもつ教育環境（キャリア発達の保障）（資料 19-2）</li> <li>○多角的なサポートや、支援が必要なことを前提として、「質の高い教育をみんなに」という課題を解決する。インクルーシブや、教育（学習）格差の問題などで、声をあげられない方々の声を吸い上げ、取りこぼしを無くす（資料 19-3）。</li> </ul> <p><b>【不登校対策】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○多様な学習形態を認めつつ、学校がもつプラスの機能を発展させる学校づくり。不登校特例校（校内フリースクールなども含む）など（資料 19-2）。</li> <li>○不登校児童・生徒の社会的自立への支援→ICTを活用した支援の仕組み、スクールカウンセラー配置拡充、校内外の居場所づくり等（資料 19-3）。</li> </ul> <p><b>【幼（保）小中（高）連携】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○幼小中高という縦の軸と地域保護者の横の軸が交じり合っ、お互いの役割を認識し合う。それぞれの教育の大切さを知り、お互いを生かしあう（資料 19-3 子供園長会）。</li> </ul> <p><b>【公民教育・主権者教育】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分自身の不満や困難を政治的な問題に捉え返し、政治に対して提言し、選挙権・被選挙権を行使し得るような公民教育・主権者教育（資料 19-1）。</li> </ul> <p><b>【英語教育の充実】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○英語を自在に使いこなす児童・生徒を育成する。例えば、英検、TOEFL Junior、Gtec などの民間試験の全校導入やALTの拡充（時数増、質の向上）、ウィロビー派遣生徒数の拡充等（資料 19-3 区立中学校長）。</li> </ul> <p><b>【地域・郷土への愛着の醸成】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「杉並」を愛し、「杉並」に住み続けていきたいと子どもたちが思えるような教育・環境・行政の整備。地域価値が上がるよう、住民意識（例えば相互扶助の精神等）の醸成（資料 19-1）。</li> <li>○地域の歴史や伝統、自然など既成の環境を学び理解するとともに、新たに地域の文化的な空気感を子どもたち自ら関わり作り上げることで、地域の一員として誇りや親しみを実感し、地域への思いを醸成する（資料 19-1）。</li> </ul> <p><b>【ICT、AI 関連】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ICTをツールとして活用し必要な情報を自ら取捨選択する力をつけていく。一方で人との関わりを通して、自分の個性も活かし、そして他者を理解し、共生していく力を育てていく（資料 19-3）。</li> <li>○「デジタル」のフル活用（この10年で「デジタル」の位置づけは社会の中で確実に変わる。極端に言うと「衣食住デジタル」になる）を推進する（資料 19-1 調整会議委員）。</li> <li>○「オンライン・遠隔授業と対面授業」「児童・生徒一人1台パソコン（ICT 活用力）」「AI を使いこなす人」（資料 19-2 区立中学校長）。</li> <li>○「情報リテラシーの向上（高い情報モラルをもち自在にPCを使いこなす事のできる児童・生徒の育成）PC、ネット環境の充実、全教科デジタル教科書導入、支援員の拡充、3Dプリンター、ロボット、ドローン等を用いた学習の開発など（資料 19-3 区立中学校長）。</li> </ul> <p><b>【SDGs 教育】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○持続可能な社会の作り手の育成。SDGs の学習（資料 19-2 調整会議委員）。</li> </ul> <p><b>【アート教育】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○アート教育。豊かな感性、デザイン思考を育てる（資料 19-2 調整会議委員）。</li> </ul> <p><b>【新たなスポーツに関する取組】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「オリンピック・パラリンピック」に変わる次の大テーマを早急に掲げ、学校教育内で数年かけて子供たちが取り組んでいく（資料 19-3 区立中学校長）。</li> </ul> <p><b>【働き方改革】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○教員の働き方改革の推進。一人一人が頑張る集合体から、協働による組織体へ（チーム学校）。また、毎年協働で「棚卸し」を実施する一方、教員は、未来を担う子どもを育てる責任と誇りをもち、学び続ける（資料 19-3、資料 19-2 調整会議委員など）。</li> </ul>

1. 今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点	2. これからの教育にとって大事な「キーワード」「視点」	3. 取組の基本的方向性
		<p><b>【区費教員の活用】</b>  ○区費教員配置による教科担任制（資料 19-2 調整会議委員）。  ○区費管理職（副校長・校長）の学校配置（資料 19-3 区立中学校長）。</p> <p><b>&lt;具体的な提案&gt;</b>  <b>①地域の大人向けの「放課後教室」の設置</b>  例えばパソコン教室など、学校で親が自由に学べ、またボランティアで教えられるような放課後教室のようなものはできないか。親も学べ、またそこで資格を得て仕事につながるような、親がワクワクできるような、保護者間だからできるような学び、その姿を見た子どもたちが学ぶ意欲を持てるような、そうした場所が学校にあれば、そこに参加した人たちがCS・PTAなどにも気楽に参加してくれるようになるのではないか。もう少しハードルが下がるとよい。  →学校がいろんな学びの拠点になってもよい。そこで新しい人間関係ができていく。学校が地域の人間関係をつくるプラットフォームになっていくこともありうる。</p> <p><b>②「人材バンク」の設置</b>  杉並区内でも、地域によってカラーがある。しかし、子どもたちへの支援にそのことで濃淡が出てはならない。区が「人材バンク」的なものを設置し、こういう協力ができる、こういうことに長けている人がいるといったような情報を、区である程度持っておき、学校運営協議会・学校支援本部などが何かしたい時に相談にのってもらえる窓口があったらと思う。</p> <p><b>③「連絡会」の設置</b>  ある程度のレベルを担保するため、学校の分区単位くらいで、学校運営協議会同士、学校支援本部同士が話し合えるような連絡会的なものを設置した方がよい。</p> <p><b>③「地域教育推進協議会の拡充(全区展開)」</b>  中学校区単位で、地域教育推進協議会を設置し、地域の教育を連続して考えられる組織体を作る(各校の学校運営協議会の集合体)（資料 19-3、資料 19-3 区立中学校長）。</p> <p><b>④「子ども教育委員会」の設置</b>  子どもたちは、大人が想像している以上に心を開き本音を語るができる(資料 19-1)。定期的に子どもたちが集まり教育長に提言する「子ども教育委員会」のようなものが出来ると面白い(第1回より)。</p> <p><b>⑤学区域の見直し</b>  連携する小学校を中学校区の学区域と一致させ、連携型でも小中一貫教育が推進できるようにする。⇒ 児童・生徒減を見越した統廃合計画の策定(資料 19-3)。</p> <p><b>⑥「総合型地域文化・スポーツクラブ」の設置</b>  生涯学習の基盤づくりとして、中学校区単位で総合型地域文化・スポーツクラブを組織し、学校施設を利活用した社会教育を充実させる。併せて、小学校の放課後活動、地域スポーツ、中学校の部活動を社会体育へ移行する(資料 19-3)。</p> <p><b>⑦「部活動拠点校」の推進</b>  公私学校選択の機会拡大や生徒数の減少が進む中、部活動の数と部員数・教員数の不均衡が生じており、部活動の拠点校の推進を計画的に進めてもらいたい(資料 19-1 区立中学校長)。</p> <p><b>⑧「幼児教育アドバイザー」の充実</b>(資料 19-3 子供園長会)  <b>⑨全教室のエアコン設置</b>(資料 19-3 区立中学校長)  <b>⑩人口芝への変更</b>(資料 19-3 区立中学校長)</p>



1. 今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点	2. これからの教育にとって大事な「キーワード」「視点」	3. 取組の基本的方向性
		①部活動支援員の拡充（資料 19-3 区立中学校長）
	4. その他、審議会のあり方や検討の進め方に関する事（教育ビジョンの構成、審議会答申等）	
	<p>○教育ビジョンは、区の教育行政の方向性の大枠を決めていくもの。どうしても子どもの議論が中心になるが、そのためには大人も加わらなくてはならない。「100年」というキーワードも出てくるので、子どもたちをどう支援していくのか、それと同時に大人がどう変わるのかという議論もできれば。</p> <p>○本来、学ぶということは、とても幸せで楽しいものだという認識が、子ども達の自己肯定感にもプラスのアプローチとして繋がるのではないかと。子ども達が、「将来、何の役にも立たない勉強」と悲観せず、「未来をイメージし、楽しく学ぶ」と感じられるような視点で教育ビジョンを創り上げていけると良い（資料 19-2）。</p> <p>○ビジョンというのは理想像。新たなビジョンを皆で語る時に夢を語るのはとても大きなこと。ただビジョンが幻にならないようにするためには具体的な実践に落とし込まれて行かなくてはいけない。それぞれの立場で、どうしたら理想の実現に向け具体的な一歩が踏み出せるのか、道筋をつけていく必要がある。例えば、ドキドキすることが学びで一番大事だとしたら、学校の先生方はより良い授業を作るための教育実践がとても重要であり、子どもは学びに向かって意欲的に取り組みながら子どもなりの責任を果たしていくということに結び付けていく必要があり、地域の大人が子どもへの見方を緩やかにしていくような風土を作っていく、といったことが同時多発的に起きると、この理想像が具現化していく。</p> <p>○本当は、杉並区は新しいことを生むとか、評価の仕方を変えとか出来たらいいと思う。会長も言われたようにPDCAサイクルでは良くならないので、違うサイクルで杉並はやっていますよといったことを打ち出すとか。たくさん価値観を学ばせるためには、おそらく細かい教科学習では学べないこともあるので、総合的に学ぶということが大事で、その実践をどう確保していくか。皆がびっくりするようなことが杉並から出来たら素晴らしいと思う。</p> <p>○子どもの発言を見ると、皆杉並区を好きだということがあふれていた。文化の香りもし自然も豊かで、杉並はローカルとしての魅力がすごくあるので、その魅力を強く打ちだしてもそこは大丈夫なのでは。</p> <p>○難しいのは、こういう審議会の場でいいことを考えれば考えるほど、それを実現する段階で、親と教師がより多くのことに対応しなくてはいけなくなってしまうということ。何を断捨離すべきかという具体的アイデアを、こういう審議会で答申を出すときにいくつか盛り込んでいかないといけない。この会で子どもがワクワクすることを考えても、親と教師がより疲弊して、結果的に子どもたちも疲弊していくということが起こりえる。</p> <p>→何かいいことをやろうと思うと負担がかかるのは学校と親の二つしかない。そこが疲弊することで子どももどんどん疲弊していくという悪循環が起こっている。国がいいことだと思って「生きる力」をつけましようと言った途端に、評価をされるということになってしまうと、横に広げていこうとしたことが縦に広がってしまう。何を辞めて、何をこうやるのかという議論をしていかないといけない。委員の皆さんから色々意見を出していただいて、その意見に対して教育委員会としてこう整理できるよということがあれば出していただくということ、機会があればやれないかなとは思っている。</p> <p>○杉並区の教育を考えたときに小中学校が中心になるのはしょうがないのかもしれないが、高校が変わらないと受験も変わらないので、高校を教育ビジョンにどう絡めていくか、都や地域に協力してもらおうのかもしれないが、その前提だけ何か考えられないだろうか。</p> <p>→区なので、区立小中学校がベースになっており、そこが重点化されているということだと思うが、高校、大学さらには大人のことも見据えて、今日は大きく議論が出来ていると思う。</p> <p>○障害のある子どもたちや保護者、難しいかもしれないが「不登校」・フリースクールに行っている子どもたち、あるいは保護者の声でもよいと思う。学校教育に対する期待について幅広い声を反映させる（資料 19-2）。</p> <p>○教育ビジョン 2012 の検証をした上で、2022 の大きな方向性について協議したい。細かな各論や対応策ではなく、教育の本筋で何をを目指すのかという高所大所からの議論をする。その上で、2012 から継続すべきこと、改善・変更すべきこと、新たに付け加えることを考えていくことが大切である。校長会代表として出席しているが、学校教育の担い手である各校長からの意見もパブコメよりもずっと前の段階で吸い上げてほしい（資料 19-3）。</p> <p>○中教審答申を見据え、そこから一歩進んだ杉並の教育ビジョンにしていきたい（資料 19-3 区立中学校校長）。</p> <p>○小中一貫教育は、今後について曖昧な状況になっている。今後、何を目指し、その実現に向けてどのように進めて行くのか盛り込んでもらいたい（資料 19-3 区立中学校校長）。</p> <p>○これまで通り、学校は、「地域の中の公共空間」という考えを継承しつつ、児童・生徒への教育を支える観点の一つとして、学校施設整備の視点も入れられればと考える。併せて、築50年を超える学校が増加している中、計画的に学校改築を進めるだけでなく、80年使用することを念頭に進めている、学校施設の長寿命化についても、ビジョンの中で触れられれば、現在策定している「杉並区学校施設整備計画（第2次改築計画）」との整合性を取ることが可能となると考える。ICT、GIGAスクール、リモート授業、中長期的な少子化などなど、これまでに経験のない新たな社会・教育環境の中で、学校施設は、どのようにあるべきなのか。これまでの整備水準の継続を目指すのか、（現実的、未来的）見直しをするのかの示唆を求めたい。（資料 19-2、19-3 調整会議委員）。</p>	

5. 会長まとめ
<p>従来、私たちが持っている観念や概念を変えていきながら、今後来るべき社会の在り方に組み替えていく。その時に「断捨離」というか、これ以上続けなくてもいいんじゃないかということも整理しながら新しいものをどう組み込んでいくか。その中で教員や保護者の方々が疲れないような在り方を考えていかなければいけないだろう。</p> <p>そのことと併せて、子どもや若者たちを支えている側としての大人達の在り方をどう考えるのか。地域というものが十分に意識できない状況になっている中で、どういうつながり方をもう一度考えていくか。その時に前回から少し出ているのが、学校という場がそういう場になっていく中で新しいコミュニティを作り上げていくというキーワードになるということが可能ではないか、という話が出ている。</p> <p>そして、その中で子どもたちの生きることを基本に置きながら彼らの権利であるとか遊びであるとか自己探求することだとか、ワクワクする生活をどう保障するのか、と同時にそれを通して大人がどうワクワクするのかといったことが問われている、といった話になった。</p>